

第八章 女神の出現（八）

不思議に堪えずして、自分（王仁）は金色燦爛たる珍玉の明光を拝して（を）、何となく力強く感じられ（て）、眺めていた（居った）。次第々に玉は大きくなるとともに、水晶のいごとくに（よう）に（澄みきり）出して、たちまち美わしき女神の御姿と変化した（まうた）。全身金色にして仏祖のいわゆる、紫摩黄金の肌で、その上に玲瓏透明にましまし（て）、白の衣装（衣装）と、下は緋の袴を穿ちたまう、愛情あふるるばかりの女神であった。女神は、自分（王仁）の手をとり笑を含んで、

『われは大便所の神なり。汝に之を捧げむ』

と言下に御懐中（御懐中）より、八寸ばかりの比礼を自分（王仁）の左手に握らせたまい、再会を約して、また元のごとく金色の玉となりて中空に舞い上り、電光石火のごとく、九重の雲深く天上に帰らせたまうた（ので在る）。

その当時は、いかなる神様なるや、また自分（王仁）にたいして何ゆえに、かくのごとき珍宝を、かかる寂寥の境域に降りて、授けたまいしやが（）疑問であった。しかし参綾後はじめて氷解ができた。（出口）教祖の御話に、

『金勝要神（禁闕要の神）は、全身（全身）黄金色であって、大便所に永年のあいだ落

仏祖………仏教を開いたお釈迦様のこと。

参綾後………綾部に上がった後。

金勝（闕）要神………大本の二代教主出口すみ子の神名。

され(て)、苦勞艱難の修行を積んだ大地の金神様である。その修行が積んで、今度世に出て、結構な御用を遊ばすようになりたのであるから、人間は大便所の掃除から、飲んで致すような精神にならぬと、誠の神の御用はできぬ。それに今の人民さんは、高い処へ上つて、高い役をしたがるが、神の御用をいたすものは、汚穢所を、美しくするのを楽しんで致すものでないと、三千世界の^{さんぜんせかい}大洗濯(大洗濯)、大掃除の御用は、到底勤め上りませぬ(らんぞよ)』

との御言葉を承わり、かつ神諭の何処にも記されたるを拝して、奇異の感に打たれ、神界の深遠微妙なる御経綸に驚いた(のである)。

女神に別れ、ただ一人、太陽も、月も、星も、見えぬ、山野を、深く進みゆく(むので在つた)。

山深く分け入る吾(我)は日月も

星さえも見ぬ狼の声

(この歌を詠んだのは、此時の事であった。)冷たい途の傍に沼とも、池とも知れぬ汚い水溜りがあつて、その水に美しい三十才余りの青年が陥り、諸々の虫に集られ、顔はそのままであるが首から下は全部蚯蚓になつてしまい、見るまに顔までがすっかり(悉皆)数万の蛆虫になつてしまった。私は思わず、「天照大神、産土神(産土大神)、惟神靈幸倍坐世(惟神靈幸坐)」と二回ばかり繰返した。(すと)不思議にも元の美しい青年に

大地の金神……大本では二代教主出口すみ子の神名とされていて、一般には富士山・立山とともに日本三霊山の一、白山に鎮座する神として信仰や伝説で知られる。また、その神霊を「白山比女(一名・菊理媛神)」と言い全国の白山神社の総本社が加賀国一の宮として石川県の鶴来町にあり、白山権現とも称する。

なって、その水溜りから這い上り、嬉しそうな顔(願)をして礼を述べた。その青年の語るところによると、

『大変に(竜女)を犯した祖先の罪によって、自分もまた悪い後継者となって(竜女)を犯しました。その罪によって、こつこつ苦しみを受けることになったのであります(る)が、今、あなた(王仁)の神文を聞いて忽ちこの通りに(助)かりまし(つ)た』

と、感謝する(る)のであった。其の顔の御本人の肉体は、今猶才皇道の大本に於て、重要な、役員(ひやくいん)の一人である(る)。

それから自分(王仁)は、天照大神の御神号を一心不乱に唱えつつ前進した。月もなく、烏もなく、霜は天地に充ち、寒さ酷しく膚を断ることく、手も足も棒のようになり息も凍らむとする時、またもや「天照大御神、惟神靈幸倍坐世(惟神靈幸坐)」と口唱し奉った。不思議にも言霊の神力著しく、たちまち全身に暖を覚え、手も足も湯に入りしことく(に)なった。

ア、地獄で神とは、このことであると、感謝の(念)は、(涙)は、(滝)と、流るるばかりであった(る)。四五十丁も辿り行くと、そこに一つの断崖に衝き当る。止むをえず、引き返さむとすれば鋭利なる槍の尖が、近く五六寸の処にきて(居)る。この上は神に任(奉)し奉(奉)らむと決意して、氷に足をすべらせしつ、右手を見れば、深き谷川があつて

竜女……聖師さまの第二女、梅野様にあ
たるとされている。

竜女を犯した青年……出口聖師の第二女
梅野様の最初の夫で、浅野遥氏のこと。大
本時代は寿賀鷹様と言った。

激潭飛沫、流声物すごき中に、名も知れぬ見た事もなき恐ろしき動物が、川へ落ちたる旅人を口にくわえて、谷川の流れに浮い（浮び）たり、沈んだり、旅人は「助けて助けて」と、一点張に叫んでいる。自分（王仁）は、ふたたび神号を奉唱す（唱えてや）ると、旅人をくわえていた怪物の姿は沫と消えてしまった。

助かった旅人の名は舟木という。彼は喜んで自分（王仁）の後に跟いてきた（附いて来るのである）。（王仁も）一人の道連れを得て、幾分か心は丈夫になってきた。危き断崖を辛うじて五六十丁ばかり進むと、途が無くなった（了了）。薄暗い途を行く二人は、ここに停立して思案にくれていた。そうすると何処ともなく大声で、

『ソレ彼ら二人を、免がすな』

と呼ぶ。にわか騒々しき物音（が）しきりに聞え来たり（て）、口の巨大なる怪物が幾百ともなく、二人の方へ向つて襲いくる様子である。二人は進退これ谷まり、いかがはせむと狼狽の体であった。何ほど神号を唱えても、少しも退却せずますます迫ってくる。今まで怪物と思つたのが、不思議にもその面部だけは人間になつてしまった。その中で巨魁らしき魔物は、たちまち長剣を揮（振）つて両人に迫りきたり、今や斬（断）り殺されむ（ん）とする刹那に、白衣（白衣）（金膚の女神が、ふたたびその場に光りとともに現われた。そして、「比礼を振らせたまえ」と言つて姿は忽ち消えてしまった。懐中より神器の比礼を出すや否や、上下左右に被（拂）つた。怪物はおいおいと遠く退却する。ヤレ嬉しやと思つた

舟木……『十年目の弟子』で知られる聖師さまに信従された湯浅仁齋氏のこと。

比礼……風にひらめくものの意で、古代、波を起こしたり、害虫・毒蛇などを払つたりする呪力があると信じられた、布様の

もなく、忽然として大蛇が現われ、巨口を開いて兩人を呑んでしまった。兩人は大蛇の腹の中を探り探り進んで行(往)く。今まで寒さに困っていた肉体は、どこともなく、暖い湯に浴したような心持であつた。轟然たる(大)音響とともに幾百千丈(幾百千里)ともわからぬ、奈落の底へ落ちゆくのであつた。

ふと気がつけば(くと)、幾千丈とも知れぬ、高い瀧(瀧)の下に、兩人は身を横たえていた。自分の周囲は氷の柱が、幾万本とも知れぬほど立ってある。兩人は、この高い瀑布から、地底へ急転直落したことを覚つた。一寸でも、一分でも身動きすれば(ると)、冷きつた氷の剣で身を破る。起きるにも起きられず、同伴の舟木を見ると、魚を串に刺したように、長い鋭い氷剣に胸のあたりを貫かれ、非常に苦しんでいる。自分(王仁)は満身の力をこめて、「アマテラスオホミカミサマ」と、一言ずつ切れ切れに(漸やくにして)、唱え奉つた。神徳たちまち現われ、自分(王仁)も舟木も身体自由になつてきた。今までの瀑布は、どこともなく、消え失せて、ただ茫々たる雪の原野と化して(了)つた。

雪の中に、幾百(万)人とも分らぬほど人間の手や足や頭の一部分が出てゐる。自分の頭の上から、にわかには山岳も崩れるばかりの響がして、雪塊が落下し来り(落ちて来て)、自分(王仁)の全身を埋めてしまふ。にわかには礼を振るつとしたが、容易に手がいうことをきかぬ。丁度鉄でこしらえた手のようになつた。一生懸命に「惟神靈幸倍坐世(惟神靈幸坐)」「を漸く)、是も(一言ずつ唱えた。幸に自分(王仁)の身体は自由が利くように

もの。

なった。四辺(傍り)を見れば(ると)、舟木の全身が、また雪に埋め(没せ)られ、頭髮
 だけが現われて(居)る。その上を比礼をもって二三回左右と振りまわすと、舟木は苦
 しそうな顔をして、雪中から全身をあらわした。(澤山の人々の身体は、或は一部、或は全
 部、雪中より露われた。)天の一方より、またまた金色の光現われて二人(、人々)の身
 辺を照した。原野の雪は、見渡すかぎり、一度にパット消えて、短い雑草の原と変った。
 あまたの人々は満面笑を含んで自分(王仁)の前にひれ伏し、救主(救主)の出現と
 一齊(一切)に感謝の意を表し、今後は救主(救主)とともに、三千世界の神業に参加
 奉仕せむことを希望する人々も沢山あった。その中には実業家もあれば、教育家もあ
 り、医者や、学者も、沢山に混つておった。(今大本に来て、神業に参加して、居る人々の
 顔も、其中に見えて居った。)
 以上は、水獄の中に第一番(第一段)の処であった。第二段、第三段となると、こんな
 軽々しき苦痛ではなかつたのである。自分(王仁)は、今この時のことを思いだすと、慄然
 として肌に粟を生ずる次第である。

瑞月

世を救ふ弥勒の神を押し込めて

苦しきもだゆる言神あはれ